筑波大学
University of Tsukuba

2020 年６月 12 日

国立大学法人　筑波大学

介護老人保健施設で看取りをした遺族の満足度は、施設内の多職種連携と関連する
～全国老人保健施設協会のアンケート結果を分析～

研究成果のポイント

1. 全国老人保健施設協会のアンケート結果を利用し、介護老人保健施設（老健施設）[注1)]で看取りをした遺族の看取り満足度と施設の体制要因との関連を分析しました。
2. 本研究により、老健施設における看取りの満足度は、施設内の多職種の職員が効果的に協働していることと関連することが示唆されました。
3. 今後、老健施設の管理医師に施設における多職種連携の重要性をさらに周知することによって、看取りの質が向上することが考えられます。

筑波大学医学医療系ヘルスサービスリサーチ分野の田宮菜奈子教授、小竹理奈・医学類６年生（現研修医）、羽成恭子・大学院医学系専攻博士課程らの研究グループは、介護老人保健施設（老健施設）における遺族の満足度と関連する施設の体制要因を調査しました。

全国老人保健施設協会が 2014 年に実施した二つのアンケートのデータを２次利用しました。調査対象は老健施設で看取りを経験した遺族と、その遺族が看取りを経験した老健施設の管理医師、施設管理者です。遺族における看取りの「満足度」と関連する各施設での各種説明体制、運営・教育等への取り組み状況を、多変量ロジスティック回帰分析により分析しました。

その結果、遺族の看取り「満足度」と有意に正の関連を示したのは、▽入所時や病態悪化時に利用者及び家族に対する状況説明が医師・多職種協働でなされていること▽施設職員のストレスマネジメントに取り組んでいること▽利用者への定期的な診察があること――などでした。

世界的には、看取りの質の評価は遺族調査が主ですが、研究グループが調べた限りでは、日本の老健施設における看取りの質に関する調査研究で、遺族を対象としたものは今までありません。

老健施設での死亡者数が増加傾向にあります。終末期医療の充実が課題となっている我が国で、質の高い看取りを提供できるよう老健施設の体制を整えることは重要だと考えられます。

本研究の結果から、多職種の職員が効果的に役割を果たしていくことが、遺族の高い看取りの満足度に関連することが示唆されました。今後，老健施設の管理医師をはじめとする医療介護提供者に、施設における多職種連携の重要性や職員のストレスマネジメントの取り組みをさらに周知することによって、看取りの質が向上することが期待されます。

※本研究成果は、2020 年６月 15 日付「日本公衆衛生雑誌」で公開予定です。

※本研究は、厚生労働省が助成する平成 29 年度厚生労働科学研究補助金　地域医療基盤開発推進研究事業「人生の最終段階における医療の在り方に関する調査の手法開発及び分析に関する研究(H28-医療-一般-013)」（研究期間：平成 28～30 年度）の協力を得て作成されました。

研究の背景

介護老人保健施設(以下、老健施設)での看取りの実施割合は増加傾向にあります。老健施設には、入所者の在宅復帰を目指した支援をしつつ，社会ニーズに応える形で看取りも行うという特性があり、今後、効果的に質の高い看取りを提供していく施設体制を整えることは重要と考えられます。

世界的には、看取りの質の評価は遺族調査が主でありますが、研究グループが調査した範囲では，我が国の老健施設における看取りの質に関する調査研究で、遺族を対象とした研究は認められませんでした。そこで、本研究では、老健施設における遺族の満足度と関連する施設の体制要因を明らかにすることを目的としました。

研究内容と成果

本研究は、いずれも全国老人保健施設協会が2014年に実施したアンケートのデータを二次利用しました。「介護老人保健施設の管理医師の有効活用による医療と介護の連携の促進に関する調査研究事業」と「地域における介護老人保健施設の役割に関する調査研究事業」の二つです。調査対象は各老健施設で計画的な看取り[注2)]を経験した直近3例の遺族、その遺族が看取りを経験した老健施設の管理医師と施設管理者でした。なお、管理医師からは施設の体制に関する情報を得、施設管理者からは各施設の入所定員数と施設類型の情報を得ました。遺族における看取りの「満足度」(「直後は悔いのない看取りだったと思えましたか」という5段階の質問に対して，最良の「大いに思えた」及びそれ以外)と関連する各施設での各種説明体制(入所～死亡までにおける説明の状況など)、運営・教育等への取り組み状況を、単変量解析及び多変量ロジスティック回帰分析により調査しました。

分析対象となった遺族は 363 人、管理医師 169 人、施設管理者 167 人でした(図 1 参照)。遺族のうち 250 人(68.9%)が「満足度」では「大いに思えた」を選択していました。多変量ロジスティック回帰分析の結果、遺族の看取り「満足度」と有意に正の関連を示したのは，利用者への定期的な診察があること(オッズ比[注3)]2.94、95%信頼区間 1.52-5.70)、入所時に利用者に対し疾病状態の説明が医師・多職種協働でなされていること(同 2.07,1.01-4.25)、病態悪化時に利用者及び家族に対し状況説明が医師・多職種協働でなされていること(同 3.12, 1.17-8.33)、施設職員のストレスマネジメントに取り組んでいること(同 3.63, 1.84-7.16)でした(表1参照)

本研究により、遺族の高い看取りの満足度に関連する施設の体制要因として、利用者及び家族への説明に際して医師以外の職種の関わりが多いことや、管理医師が施設職員へのストレスマネジメントに配慮していることが示唆されました。

今後の展開

施設の運営に際し、利用者や家族への説明においては多職種で関わること、施設職員のストレスマネジメントに取り組んでいくことにより、老健施設での看取りの質が向上する可能性があります。なお、本研究では利用者や家族への説明において具体的にどのように多職種が関わっていたのか、また、ストレスマネジメントへの取り組み内容といった詳細は明らかではありません。今後、より具体的な内容を調査していく必要があると考えます。

参考図

図１　分析対象者決定までのフロー

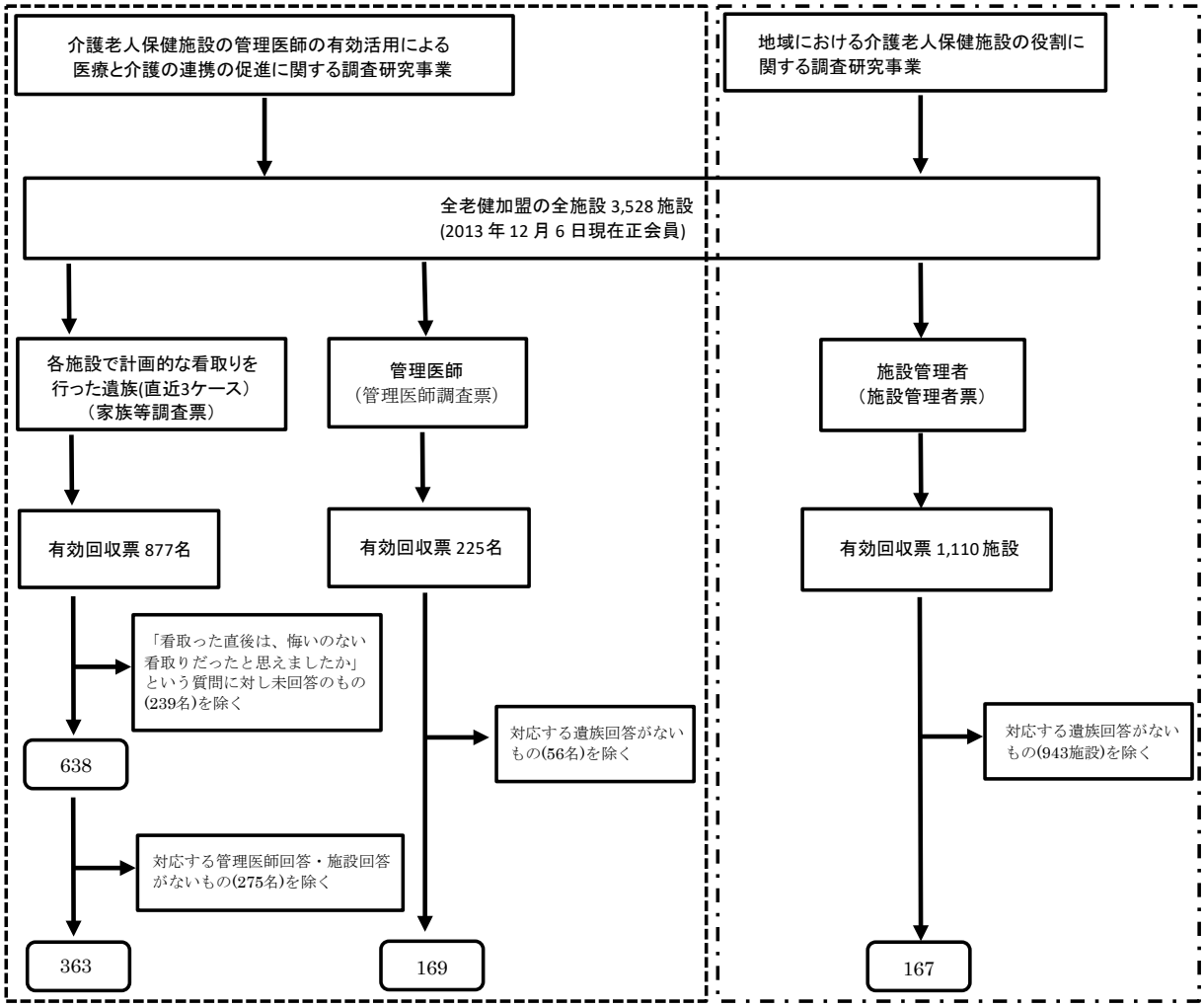

表１　看取り直後の看取りの満足度と各回答項目との多変量ロジスティック回帰分析結果

	オッズ比	95%信頼区間	p値
管理医師回答			
年齢（歳）	1.01	0.99-1.04	0.430
性別			
男性	1.00		
女性	2.32	0.85-6.34	0.102
利用者への定期的な診察			
なし	1.00		
あり	2.94	1.52-5.70	0.001
入所時に利用者に対し、疾病状態の説明			
医師中心	1.00		
医師･多職種協働	2.07	1.01-4.25	0.047
病態悪化時に利用者および家族に対し、状況説明			
医師中心	1.00		
医師･多職種協働	3.12	1.17-8.33	0.023
施設職員のストレスマネジメントに取り組んでいますか			
医師中心	1.00		
医師･多職種協働	3.63	1.84-7.16	<0.001

※遺族要因（年齢、臨終の際の立ち合いの有無、故人との終末期医療に関する話し合いの有無）、施設要因（入所定員数、施設類型）は調整変数として投入した

用語解説

注1)介護老人保健施設　要介護度1～5の要介護認定を受けた高齢者で、心身の機能の維持回復を図り、居宅における生活を営むことができるようにするための支援が必要な方に、医学的管理の下、看護・介護及び機能訓練はもとより、食事や入浴など日常生活のお世話まで提供することを目的とした施設です。このように在宅復帰支援の役割がある老健施設ですが、近年では看取りの人数が増加傾向にあります。利用者の方やご家族による、在宅支援の一環として入退所を繰り返してきたなじみの施設で最期を迎えたいという希望や、長期入所を余儀なくされる利用者の方がその経過の中に最期を迎えるケースが増えていることが背景にあります。本研究の対象ではありませんが、介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)は、原則として在宅での生活が困難な要介護度3以上の要介護認定を受けた高齢者に、入浴・排せつ・食事等の介護やその他の日常生活上のお世話、機能訓練、健康管理及び療養上のお世話を行うことを目的とする施設で、役割が異なります。

注2)計画的な看取り　ここでは、介護老人保健施設内で、あらかじめ看取りを行うことを想定し、実際に看取りまで支援を実施した場合を示しています。

注3)オッズ比　ここでは、介護老人保健施設における管理医師回答において、ある選択肢を選び回答した管理医師の施設に比べて、もう一方の選択肢を選び回答した管理医師の施設での遺族の看取りの満足度が高い可能性が何倍あるかを示しています。例えば、利用者への定期的な診察がある施設のオッズ比が 2.9 ということは、管理医師の定期的な診察がない施設に比べて、定期的な診察がある施設では約 2.9 倍遺族の看取りの満足度が高い可能性があると言えます。多変量ロジスティック回帰モデルを用いて、遺族の年齢と臨終の際の立ち合いの有無、故人との終末期医療に関する話し合いの有無、施設の入所定員数と施設類型を統計学的に調整しています。

掲載論文

【題　名】 介護老人保健施設で看取りを行った遺族における看取りの満足度との関連要因
Factors related to bereaved family's satisfaction with end-of-life care at geriatric health services facility
【著者名】 小竹　理奈，羽成　恭子，岩上　将夫，大河内　二郎，植嶋　大晃，田宮　菜奈子
【掲載誌】 日本公衆衛生雑誌 67 巻 6 号

問合わせ先

田宮　菜奈子（たみや　ななこ）
筑波大学　医学医療系　ヘルスサービスリサーチ分野 / ヘルスサービス開発研究センター　教授